

第 12 章

二人は石の螺旋階段の一番上で降り、マクゴナガル先生が扉を叩いた。

音もなり扉が開き、二人は中に入った。

マクゴナガル先生は待っていなさいと、ハリーをそこに一人残し、どこかに行った。

ハリーはあたりを見回した。今学期になってハリーはいろいろな先生の部屋に入ったが、ダンブルドアの校長室が、ダントツに一番おもしろい。

学校からまもなく放り出されるのではないかと、恐怖で縮み上がっていなかったら、きっとハリーは、こんなふうに、じつくりと部屋を眺めるチャンスができて、とても嬉しかったことだろう。

そこは広くて美しい円形の部屋で、おかしな小さな物音で満ち溢れていた。

紡錘形の華奢な脚がついたテーブルの上には、奇妙な銀の道具が立ち並び、クルクル回りながらポツポツと小さな煙を吐いている。壁には歴代の校長先生の写真が掛かっていたが、額縁の中でみんなすやすや眠っていた。大きな鉤爪脚の机もあり、その後ろの棚には、みすばらしいポロポロの三角帽子が載っている——「組分け帽子」だ。

ハリーは眠っている壁の校長先生たちをそーっと見渡した。

帽子を取って、もう一度かぶってみても、かまわないだろうか？ ハリーはためらった。かまわないだろう。……確認するだけなんだ。

僕の組分けは正しかったのかどうかって——

ハリーはそっと机の後ろに回り込み、棚から帽子を取り上げ、そろそろとかぶった。

帽子が大き過ぎて、前のときもそうだったが、今度も、目の上まで滑り落ちてきた。

ハリーは帽子の内側の闇を見つめて、待った。

すると、かすかな声がハリーの耳にささやいた。

「何か、思いつめているね？ ハリー・ポッター——」

「ええ、そうです」ハリーは口ごもった。

Chapter 12

The Polyjuice Potion

They stepped off the stone staircase at the top, and Professor McGonagall rapped on the door. It opened silently and they entered. Professor McGonagall told Harry to wait and left him there, alone.

Harry looked around. One thing was certain: of all the teachers' offices Harry had visited so far this year, Dumbledore's was by far the most interesting. If he hadn't been scared out of his wits that he was about to be thrown out of school, he would have been very pleased to have a chance to look around it.

It was a large and beautiful circular room, full of funny little noises. A number of curious silver instruments stood on spindle-legged tables, whirring and emitting little puffs of smoke. The walls were covered with portraits of old headmasters and headmistresses, all of whom were snoozing gently in their frames. There was also an enormous, claw-footed desk, and, sitting on a shelf behind it, a shabby, tattered wizard's hat — the *Sorting Hat*.

Harry hesitated. He cast a wary eye around the sleeping witches and wizards on the walls. Surely it couldn't hurt if he took the hat down and tried it on again? Just to see ... just to make sure it *had* put him in the right House —

He walked quietly around the desk, lifted the hat from its shelf, and lowered it slowly onto his head. It was much too large and slipped down over his eyes, just as it had done the last time he'd put it on. Harry stared at the black inside of the hat, waiting. Then a small voice said in his ear, "Bee in your bonnet,

「あの——おじゃましてごめんなさい——お聞きしたいことがあって——」

「わたしが君を組分けした寮が、まちがいではないかと気にしてるね」帽子はさざりと言った。

「さよう……君の組分けは特に難しかった。しかし、わたしが前に言った言葉は今も変わらない」ハリーは心が躍った。

「——君はスリザリンでうまくやれる可能性がある」

ハリーの胃袋がズシンと落ち込んだ。

帽子のてっぺんをつかんでぐいっと脱ぐと、薄汚れてくたびれた帽子が、だらりとハリーの手からぶら下がっていた。

気分が悪くなり、ハリーは帽子を棚に押し戻した。

「あなたはまちがっている」動かず物言わぬ帽子に向かって、ハリーは声を出して話しかけた。

帽子はじっとしている。

ハリーは帽子を見つめながらあとずきりした。

ふと、奇妙なゲッゲッという音が聞こえて、ハリーはくると振り返った。

ハリーは、一人きりではなかった。

扉の裏側に金色の止まり木があり、羽を半分むしられた七面鳥のようなよぼよぼの鳥が止まっていた。

ハリーがじっと見つめると、鳥はまたゲッゲッと声をあげながら邪悪な目つきで見返した。

ハリーは鳥が重い病気ではないかと思った。目はどんよりとし、ハリーが見ている間にもまた尾羽が二、三本抜け落ちた。

——ダンブルドアのペットの鳥が、僕の他には誰もいないこの部屋で死んでしまったら、万事休すだ、僕はもうダメだ——そう思った途端、鳥が炎に包まれた。

ハリーは驚いて叫び声をあげ、あとずきりして机にぶつかった。

どこかにコップ一杯の水でもないかと、ハリーは夢中で周りを見回した。が、どこにも見当たらない。

その間に鳥は火の玉となり、一声鋭く鳴いたかと思うと、次の瞬間、跡形もなくなってし

Harry Potter?”

“Er, yes,” Harry muttered. “Er — sorry to bother you — I wanted to ask —”

“You’ve been wondering whether I put you in the right House,” said the hat smartly. “Yes ... you were particularly difficult to place. But I stand by what I said before” — Harry’s heart leapt — “you *would* have done well in Slytherin —”

Harry’s stomach plummeted. He grabbed the point of the hat and pulled it off. It hung limply in his hand, grubby and faded. Harry pushed it back onto its shelf, feeling sick.

“You’re wrong,” he said aloud to the still and silent hat. It didn’t move. Harry backed away, watching it. Then a strange, gagging noise behind him made him wheel around.

He wasn’t alone after all. Standing on a golden perch behind the door was a decrepit-looking bird that resembled a half-plucked turkey. Harry stared at it and the bird looked balefully back, making its gagging noise again. Harry thought it looked very ill. Its eyes were dull and, even as Harry watched, a couple more feathers fell out of its tail.

Harry was just thinking that all he needed was for Dumbledore’s pet bird to die while he was alone in the office with it, when the bird burst into flames.

Harry yelled in shock and backed away into the desk. He looked feverishly around in case there was a glass of water somewhere but couldn’t see one; the bird, meanwhile, had become a fireball; it gave one loud shriek and next second there was nothing but a smoldering pile of ash on the floor.

The office door opened. Dumbledore came in, looking very somber.

まった。
一振りの灰が床の上でブスブスと煙を上げているだけだった。
校長室のドアが開いた。ダンブルドアが陰鬱な顔をして現れた。
「先生」ハリーはあえぎながら言った。
「先生の鳥がー僕、何もできなくてー急に火がついたんですー」
驚いたことに、ダンブルドアは微笑んだ。
「そろそろだったのじゃ。あれはこのごろ惨めな様子だったのな、早くすませてしまうようにと、何度も言い聞かせておったんじゃ」
ハリーがポカンとしているので、ダンブルドアがクスクス笑った。
「ハリー、フォークスは不死鳥じゃよ。死ぬときが来ると炎となって燃え上がる。そして灰の中から蘇るのじゃ。見ててごらん……」
ハリーが見下ろすと、ちょうど小さくしゃくしゃの雛が灰の中から頭を突き出しているところだった。
雛も老鳥のときと同じぐらい醜かった。
「ちょうど『燃焼日』にあれの姿を見ることになって、残念じゃったの」
ダンブルドアは事務机に座りながら言った。
「あれはいつもは実に美しい鳥なんじゃ。羽は見事な赤と金色でな。うっとりするような生物じゃよ、不死鳥というのは。驚くほどの重い荷を運び、涙には癒しの力があり、ペットとしては忠実なことこの上ない」
フォークスの火事騒ぎのショックで、ハリーは自分がなぜここにいるのかを忘れていた。一挙に思い出したのは、ダンブルドアが机に座り、背もたれの高い椅子に腰掛け、明るいブルーの瞳で、すべてを見透すようなまなざしをハリーに向けたときだ。
ダンブルドアが次の言葉を話し出す前に、バーンとどえらい音をたてて扉が勢いよく開き、ハグリッドが飛び込んできた。
目を血走らせ、真っ黒なもじゃもじゃ頭の上にバラクラバ頭巾をチョコンと載せて、手には鶏の死骸をまだブラブラさせている。
「ハリーじゃねえです。ダンブルドア先生」
ハグリッドが急ぎ込んで言った。
「俺はハリーと話してたです。この子が発見

“Professor,” Harry gasped. “Your bird — I couldn’t do anything — he just caught fire —”

To Harry’s astonishment, Dumbledore smiled.

“About time, too,” he said. “He’s been looking dreadful for days; I’ve been telling him to get a move on.”

He chuckled at the stunned look on Harry’s face.

“Fawkes is a phoenix, Harry. Phoenixes burst into flame when it is time for them to die and are reborn from the ashes. Watch him …”

Harry looked down in time to see a tiny, wrinkled, newborn bird poke its head out of the ashes. It was quite as ugly as the old one.

“It’s a shame you had to see him on a Burning Day,” said Dumbledore, seating himself behind his desk. “He’s really very handsome most of the time, wonderful red and gold plumage. Fascinating creatures, phoenixes. They can carry immensely heavy loads, their tears have healing powers, and they make highly *faithful* pets.”

In the shock of Fawkes catching fire, Harry had forgotten what he was there for, but it all came back to him as Dumbledore settled himself in the high chair behind the desk and fixed Harry with his penetrating, light-blue stare.

Before Dumbledore could speak another word, however, the door of the office flew open with an almighty bang and Hagrid burst in, a wild look in his eyes, his balaclava perched on top of his shaggy black head and the dead rooster still swinging from his hand.

“It wasn’t Harry, Professor Dumbledore!” said Hagrid urgently. “I was talkin’ ter him *seconds* before that kid was found, he never

されるほんの数秒前のこっす。先生さま、ハリーにはそんな時間はねえです……」

ダンブルドアは何か言おうとしたが、ハグリッドが喚き続けていた。興奮して鶏を振り回すので、そこら中に羽が飛び散った。

「……ハリーのはずがねえです。俺は魔法省の前で証言したってようがす……」

「ハグリッド、わしはー」

「……先生さま、まちがってなさる。俺は知っとるです。ハリーは絶対そんなー」

「ハグリッド！」ダンブルドアは大きな声で言った。

「わしはハリーがみんなを襲ったとは考えておらんよ」

「……ヘッ」手に持った鶏がぐにやりと垂れ下がった。

「……………へい。俺は外で待ってますだ。校長先生」

そして、ハグリッドはきまり悪そうにドシンドシンと出て行った。

「先生、僕じゃないとお考えなのですか？」ハリーは祈るように繰り返した。ダンブルドアは机の上に散らばった、鶏の羽を払いのけていた。

「そうじゃよ、ハリー」ダンブルドアはそう言いながらも、また陰鬱な顔をした。

「しかし、君には話したいことがあるのじゃ」

ダンブルドアは長い指の先を合わせ、何か考えながらハリーをじっと見ていた。

ハリーは落ち着かない気持ちでじっと待った。

「ハリー、まず、君に聞いておかねばならん。わしに何か言いたいことはないかの？」やわらかな口調だった。

「どんなことでもよい」

ハリーは何を言ってよいかわからなかった。マルフォイの叫びを思い出した。

「次はおまえたちの番だぞ、『穢れた血』め！」それから、「嘆きのマートル」のトイレでフツフツ煮えているポリジュース菓。

さらに、ハリーが二回も聞いた正体の見えない声。ロンが言ったことを思い出した。

「誰にも聞こえない声が聞こえるのは、魔法界でも狂気の始まりだって思われてる」

そして、みんなが自分のことをなんて言って

had time, sir —”

Dumbledore tried to say something, but Hagrid went ranting on, waving the rooster around in his agitation, sending feathers everywhere.

“— it can’t’ve bin him, I’ll swear it in front o’ the Ministry o’ Magic if I have to —”

“Hagrid, I —”

“— yeh’ve got the wrong boy, sir, I *know* Harry never —”

“*Hagrid!*” said Dumbledore loudly. “I do *not* think that Harry attacked those people.”

“Oh,” said Hagrid, the rooster falling limply at his side. “Right. I’ll wait outside then, Headmaster.”

And he stomped out looking embarrassed.

“You don’t think it was me, Professor?” Harry repeated hopefully as Dumbledore brushed rooster feathers off his desk.

“No, Harry, I don’t,” said Dumbledore, though his face was somber again. “But I still want to talk to you.”

Harry waited nervously while Dumbledore considered him, the tips of his long fingers together.

“I must ask you, Harry, whether there is anything you’d like to tell me,” he said gently. “Anything at all.”

Harry didn’t know what to say. He thought of Malfoy shouting, “You’ll be next, Mudbloods!” and of the Polyjuice Potion simmering away in Moaning Myrtle’s bathroom. Then he thought of the disembodied voice he had heard twice and remembered what Ron had said: “*Hearing voices no one else can hear isn’t a good sign, even in the wizarding world.*” He thought, too, about what

いたかを思い浮かべた。

自分はサラザール・スリザリンとなんらかの関わりがあるのではないかという恐れがついついてのこと……。

「いいえ。先生、何もありません」ハリーが答えた。

ジャスティンと「ほとんど首無しニック」の二人が一度に襲われた事件で、これまでのように単なる不安感ではすまなくなり、パニック状態が起こった。

奇妙なことに、一番不安を煽ったのはニックの運命だった。ゴーストにあんなことが出来るなんて、いったい何者なのかと、寄ると触るとその話だった。もう死んでいる者に危害を加えるなんて、どんな恐ろしい力を持っているんだろう！クリスマスに帰宅しようと、生徒たちがなだれを打ってホグワーツ特急の予約を入れた。

「この調子じゃ、居残るのは僕たちだけになりそう」ロンがハリーとハーマイオニーに言った。

「僕たちと、マルフォイ、クラップ、ゴイルだ。こりゃ楽しい休暇になるぞ」

クラップとゴイルは、常にマルフォイのやる通りに行動したので、居残り組に名前を書いた。

ほとんどみんないなくなることが、ハリーにはむしろ嬉しかった。

廊下でハリーに出会えると、まるでハリーが牙を生やしたり、毒を吐き出したりすると思っているかのように、みんなハリーを避けて通った。ハリーがそばを通ると、指差しては「シーッ」と言ったり、ヒソヒソ声になったり、もうハリーはうんざりだった。

フレッドとジョージにしてみれば、こんなおもしろいことはないらしい。

二人でわざわざハリーの前に立って、廊下を行進し、「したーに、下に、まっこと邪悪な魔法使い、スリザリンの継承者様のお通りだ……」と先触れした。

パーシーはこのふざけをまったく認めなかった。

「笑いごとじゃないぞ」パーシーは冷たく言った。

everyone was saying about him, and his growing dread that he was somehow connected with Salazar Slytherin. ...

“No,” said Harry. “There isn’t anything, Professor. ...”

The double attack on Justin and Nearly Headless Nick turned what had hitherto been nervousness into real panic. Curiously, it was Nearly Headless Nick’s fate that seemed to worry people most. What could possibly do that to a ghost? people asked each other; what terrible power could harm someone who was already dead? There was almost a stampede to book seats on the Hogwarts Express so that students could go home for Christmas.

“At this rate, we’ll be the only ones left,” Ron told Harry and Hermione. “Us, Malfoy, Crabbe, and Goyle. What a jolly holiday it’s going to be.”

Crabbe and Goyle, who always did whatever Malfoy did, had signed up to stay over the holidays, too. But Harry was glad that most people were leaving. He was tired of people skirting around him in the corridors, as though he were about to sprout fangs or spit poison; tired of all the muttering, pointing, and hissing as he passed.

Fred and George, however, found all this very funny. They went out of their way to march ahead of Harry down the corridors, shouting, “Make way for the Heir of Slytherin, seriously evil wizard coming through. ...”

Percy was deeply disapproving of this behavior.

“It is *not* a laughing matter,” he said coldly.

“Oh, get out of the way, Percy,” said Fred. “Harry’s in a hurry.”

「おい、パーシー、どけよ。ハリー様は、はやく行かねばならぬ」とフレッド。

「そうだと。牙をむき出した召使とお茶をお飲みになるので、『秘密の部屋』にお急ぎなのだ」

ジョージが嬉しそうにクックッと笑った。ジニーも冗談だとは思っていなかった。フレッドがハリーに「次は誰を襲うつもりか」と大声で尋ねたり、ジョージがハリーと出会ったとき、大きなんにくの束で追ひ払うふりをする、そのたびに、ジニーは「お願い、やめて」と涙声になった。

ハリーは気にしていなかった。少なくともフレッドとジョージは、ハリーがスリザリンの継承者だなんて、まったくバカげた考えだと思っている。そう思うと気が楽になった。二人の道化ぶりを見るたび、ドラコ・マルフォイはイライラし、ますます不機嫌になっていくようだった。

「そりゃ、ほんとうは自分なのだって言いたくてしょうがないからさ」ロンがわけ知り顔で言った。

「あいつ、ほら、どんなことだって、自分を負かすやつは憎いんだ。なにしろ君は、やつの悪行の功績を全部自分のものにしてるわけだろ」

「それに、長くはお待たせしないわ」ハーマイオニーが満足げに言った。

「ポリジュース薬がまもなく完成よ。彼の口から真実を聞く日も近いわ」

とうとう学期が終わり、降り積もった雪と同じぐらい深い静寂が城を包んだ。

ハリーにとっては、憂鬱どころか安らかな日々だった。ハーマイオニーやウィーズリー兄弟たちと一緒に、グリフィンドール塔を思い通りにできるのは楽しかった。

誰にも迷惑をかけずに大きな音を出して「爆発ゲーム」をしたり、秘かに決闘の練習をした。

フレッド、ジョージ、ジニーも、両親と一緒にエジプトにいる兄のビルを訪ねるより、学校に残る方を選んだ。

パーシーは「おまえたちの子供っぽい行動はけしからん」と、グリフィンドールの談話室

“Yeah, he’s off to the Chamber of Secrets for a cup of tea with his fanged servant,” said George, chortling.

Ginny didn’t find it amusing either.

“Oh, *don’t*,” she wailed every time Fred asked Harry loudly who he was planning to attack next, or when George pretended to ward Harry off with a large clove of garlic when they met.

Harry didn’t mind; it made him feel better that Fred and George, at least, thought the idea of his being Slytherin’s heir was quite ludicrous. But their antics seemed to be aggravating Draco Malfoy, who looked increasingly sour each time he saw them at it.

“It’s because he’s *bursting* to say it’s really him,” said Ron knowingly. “You know how he hates anyone beating him at anything, and you’re getting all the credit for his dirty work.”

“Not for long,” said Hermione in a satisfied tone. “The Polyjuice Potion’s nearly ready. We’ll be getting the truth out of him any day now.”

At last the term ended, and a silence deep as the snow on the grounds descended on the castle. Harry found it peaceful, rather than gloomy, and enjoyed the fact that he, Hermione, and the Weasleys had the run of Gryffindor Tower, which meant they could play Exploding Snap loudly without bothering anyone, and practice dueling in private. Fred, George, and Ginny had chosen to stay at school rather than visit Bill in Egypt with Mr. and Mrs. Weasley. Percy, who disapproved of what he termed their childish behavior, didn’t spend much time in the Gryffindor common room. He had already told them pompously that *he* was only staying over Christmas

にはあまり顔を出さなかった。

「クリスマスに僕が居残るのは、この困難な時期に先生方の手助けをするのが、監督生としての義務だからだ」と、パーシーはもったいぶって説明していた。

クリスマスの朝が来た。寒い、真っ白な朝だった。寮の部屋にはハリーとロンしか残っていなかったが、朝早く起こされてしまった。二人分のプレゼントを持って、すっかり着替えをすませたハーマイオニーが、部屋に飛び込んできたのだ。

「起きなさい」

ハーマイオニーは窓のカーテンを開けながら、大声で呼びかけた。

「ハーマイオニー——君は男子寮に来ちゃいけないはずだよ」

ロンはまぶしように目を覆いながら言った。

「あなたにもメリー・クリスマスよ」ハーマイオニーは、ロンにプレゼントをポーンと投げながら言った。

「わたし、もう一時間も前から起きて、煎じ薬にクサカゲロウを加えてたの。完成よ」ハリーは途端に目がバッチリ覚めて、起き上がった。

「ほんと？」

「絶対よ」

ハーマイオニーはネズミのスキヤバーズを脇に押しやって、ハリーのベッドの枕許に腰掛けた。

「すごいや」

ハリーが尊敬の念を込めてハーマイオニーを見つめるとぱっとハーマイオニーの頬が赤くなった。

「やるんなら、今夜だわね」

ちょうどそのとき、ヘドウィグがスウィーッと部屋に入ってきた。

嘴にちっぽけな包みをくわえている。

「やあ」ベッドに降り立ったヘドウィグに、ハリーは嬉しそうに話しかけた。

「また僕と口をきいてくれるのかい？」

ヘドウィグはハリーの耳をやさしくかじった。

その方が、運んできてくれた包みよりずっといい贈物だった。

包みはダーズリー一家からで、爪楊枝一本と

because it was his duty as a prefect to support the teachers during this troubled time.

Christmas morning dawned, cold and white. Harry and Ron, the only ones left in their dormitory, were woken very early by Hermione, who burst in, fully dressed and carrying presents for them both.

“Wake up,” she said loudly, pulling back the curtains at the window.

“Hermione — you’re not supposed to be in here —” said Ron, shielding his eyes against the light.

“Merry Christmas to you, too,” said Hermione, throwing him his present. “I’ve been up for nearly an hour, adding more lacewings to the potion. It’s ready.”

Harry sat up, suddenly wide awake.

“Are you sure?”

“Positive,” said Hermione, shirting Scabbers the rat so that she could sit down on the end of Ron’s four-poster. “If we’re going to do it, I say it should be tonight.”

At that moment, Hedwig swooped into the room, carrying a very small package in her beak.

“Hello,” said Harry happily as she landed on his bed. “Are you speaking to me again?”

She nibbled his ear in an affectionate sort of way, which was a far better present than the one that she had brought him, which turned out to be from the Dursleys. They had sent Harry a toothpick and a note telling him to find out whether he’d be able to stay at Hogwarts for the summer vacation, too.

The rest of Harry’s Christmas presents were far more satisfactory. Hagrid had sent him a large tin of treacle toffee, which Harry decided

メモが入っており、メモには、夏休み中にも学校に残れないかどうか聞いておけると書いてあった。

他のプレゼントはもっとずっと嬉しいものばかりだった。ハグリッドは糖蜜ヌガーを大きな缶一杯贈ってくれた。

ハリーはそれを火のそばに置いて柔らかくしてから食べることにした。

ロンは、お気に入りのクィディッチ・チームのおもしろいことがあれこれ書いてある「キャノンズと飛ぼう」という本をくれた。

ハーマイオニーはデラックスな鷲羽のペンをくれた。

最後の包みを開くと、ウィーズリーおばさんからの新しい手編みのセーターと、大きなプラムケーキが出てきた。

おばさんのクリスマスカードを飾りながら、ハリーの胸に新たな自責の念が押し寄せてきた――。

ウィーズリーおじさんの車は「暴れ柳」に衝突して以来、行方が知れないし、その上、ロンと一緒にこれからひとしきり校則を破る計画を立てているのだ。

ホグワーツのクリスマス・ディナーだけは、何があろうと楽しい。

たとえこれからポリジュース薬を飲むことを恐れている人だって、やっぱり楽しい。

大広間は豪華絢爛だった。

霜に輝くクリスマス・ツリーが何本も立ち並び、ヒイラギとヤドリギの小枝が、天井を縫うように飾られ、魔法で、天井から暖かく乾いた雪が降りしきっていた。

ダンブルドアは、お気に入りのクリスマス・キャロルを二、三曲指揮し、ハグリッドは、エッグノッグを杯でがぶ飲みするたびに、もともと大きい声がますます大きくなった。

「監督生」のバッジに、フレッドがいたずらして字を変え、「劣等生」にしてしまったことに気がつかないパーシーは、みんながクスクス笑うたびに、どうして笑うのか聞いていた。

マルフォイはスリザリンのテーブルの方から、聞こえよがしにハリーの新しいセーターの悪口を言っていたが、ハリーは気にも止めなかった。うまくいけば、あと数時間で、マ

to soften by the fire before eating; Ron had given him a book called *Flying with the Cannons*, a book of interesting facts about his favorite Quidditch team, and Hermione had bought him a luxury eagle-feather quill. Harry opened the last present to find a new, hand-knitted sweater from Mrs. Weasley and a large plum cake. He read her card with a fresh surge of guilt, thinking about Mr. Weasley's car (which hadn't been seen since its crash with the Whomping Willow), and the bout of rule-breaking he and Ron were planning next.

No one, not even someone dreading taking Polyjuice Potion later, could fail to enjoy Christmas dinner at Hogwarts.

The Great Hall looked magnificent. Not only were there a dozen frost-covered Christmas trees and thick streamers of holly and mistletoe crisscrossing the ceiling, but enchanted snow was falling, warm and dry, from the ceiling. Dumbledore led them in a few of his favorite carols, Hagrid booming more and more loudly with every goblet of eggnog he consumed. Percy, who hadn't noticed that Fred had bewitched his prefect badge so that it now read "Pin-head," kept asking them all what they were sniggering at. Harry didn't even care that Draco Malfoy was making loud, snide remarks about his new sweater from the Slytherin table. With a bit of luck, Malfoy would be getting his comeuppance in a few hours' time.

Harry and Ron had barely finished their third helpings of Christmas pudding when Hermione ushered them out of the hall to finalize their plans for the evening.

"We still need a bit of the people you're changing into," said Hermione matter-of-factly, as though she were sending them to the

ルフォイは罪の報いを受けることになるのだ。

ハリーとロンが、まだクリスマス・プディングの三皿目を食べているのに、ハーマイオニーが二人を追いたてて大広間から連れ出し、今夜の計画の詰めに入った。

「これから変身する相手の一部分が必要なの」

ハーマイオニーは、まるで二人にスーパーに行き洗剤を買ってこいとでもいうように、こともなげに言った。

「当然、クラップとゴイルから取るのが一番だわ。マルフォイの腰巾着だから、あの二人にだったらなんでも話すでしょうし。それと、マルフォイの取り調べをしてる最中に、本物のクラップとゴイルが乱入するなんてことが絶対ないようにしておかなきゃ」

「わたし、みんな考えてあるの」

ハリーとロンが度肝を抜かれた顔をしているのを無視して、ハーマイオニーはすらすらと言った。

そしてふっくらしたチョコレートケーキを二個差し出した。

「簡単な眠り薬を仕込んでおいたわ。あなたたちはクラップとゴイルがこれを見つけるようにしておけば、それだけでいいの。あの二人がどんなに意地汚いか、ご存知の通りだから、絶対食べるに決まってる。眠ったら、髪の毛を二、三本引っっこ抜いて、それから二人を箒用の物置に隠すのよ」

ハリーとロンは大丈夫かなと顔を見合わせた。

「ハーマイオニー、僕、ダメなようなー」
「それって、ものすごく失敗するんじゃないー」

しかし、ハーマイオニーの目には、厳格そのもののきらめきがあった。時々マクゴナガル先生が見せるあれだ。

「煎じ薬は、クラップとゴイルの毛がないと役に立ちません」断固たる声だ。

「あなたたち、マルフォイを尋問したいの？したくないの？」

「ああ、わかったよ。わかったよ」とハリーが言った。

supermarket for laundry detergent. “And obviously, it’ll be best if you can get something of Crabbe’s and Goyle’s; they’re Malfoy’s best friends, he’ll tell them anything. And we also need to make sure the real Crabbe and Goyle can’t burst in on us while we’re interrogating him.

“I’ve got it all worked out,” she went on smoothly, ignoring Harry’s and Ron’s stupefied faces. She held up two plump chocolate cakes. “I’ve filled these with a simple Sleeping Draught. All you have to do is make sure Crabbe and Goyle find them. You know how greedy they are, they’re bound to eat them. Once they’re asleep, pull out a few of their hairs and hide them in a broom closet.”

Harry and Ron looked incredulously at each other.

“Hermione, I don’t think —”

“That could go seriously wrong —”

But Hermione had a steely glint in her eye not unlike the one Professor McGonagall sometimes had.

“The potion will be useless without Crabbe’s and Goyle’s hair,” she said sternly. “You do *want* to investigate Malfoy, don’t you?”

“Oh, all right, all right,” said Harry. “But what about you? Whose hair are you ripping out?”

“I’ve already got mine!” said Hermione brightly, pulling a tiny bottle out of her pocket and showing them the single hair inside it. “Remember Millicent Bulstrode wrestling with me at the Dueling Club? She left this on my robes when she was trying to strangle me! And she’s gone home for Christmas — so I’ll just have to tell the Slytherins I’ve decided to come

「でも、君のは？ 誰の髪の毛を引っこ抜くの？」

「わたしのはもうあるの！」 ハーマイオニーは高らかにそう言うと、ポケットから小瓶を取り出し、中に入っている一本の髪の毛を見せた。

「覚えてる？ 決闘クラブでわたしと取っ組み合ったミリセント・ブルストロード。わたしの首を締めようとしたとき、わたしのローブにこれが残ってたのくそれに、彼女クリスマスで帰っちゃっていないしーだから、スリザリン生には、学校に戻ってきちゃったと言えればいいわ」

ハーマイオニーがポリジュース薬の様子を見に、慌しく出て行ったあとで、ロンが運命に打ちひしがれたような顔でハリーを見た。

「こんなにしくじりそうなことだらけの計画って、聞いたことあるかい？」

ところが、作戦第一号はハーマイオニーの言った通りに、苦もなく進行した。

これにはハリーもロンも驚嘆した。クリスマスの午後のお茶のあと、二人で誰もいなくなった玄関ホールに隠れ、クラブとゴイルを待ち伏せした。

スリザリンのテーブルに、たった二人残ったクラブとゴイルは、デザートの大皿の四皿目をガツガツたいらげていた。

ハリーはチョコレートケーキを、階段の手すりの端にちゃんと載せておいた。大広間からクラブとゴイルが出てきたので、ハリーとロンは、正面の扉の脇に立っている鎧の陰に急いで隠れた。

クラブが大喜びでケーキを指差してゴイルに知らせ、二つとも引っつかんだのを見て、ロンが有頂天になってハリーにささやいた。

「あそこまでバカになれるもんかな？」

ニヤニヤとバカ笑いしながら、クラブとゴイルはケーキを丸ごと大きな口に収めた。

しばらくは二人とも、「もうけた」という顔で意地汚くもごもご口を動かしていた。

それから、そのまんまの表情で、二人ともパタンと仰向けに床に倒れた。

一番難しい一幕は、ホールの反対側にある物置に二人を隠すことだった。

back.”

When Hermione had hustled off to check on the Polyjuice Potion again, Ron turned to Harry with a doom-laden expression.

“Have you ever heard of a plan where so many things could go wrong?”

But to Harry's and Ron's utter amazement, stage one of the operation went just as smoothly as Hermione had said. They lurked in the deserted entrance hall after Christmas tea, waiting for Crabbe and Goyle who had remained alone at the Slytherin table, shovelling down fourth helpings of trifle. Harry had perched the chocolate cakes on the end of the banisters. When they spotted Crabbe and Goyle coming out of the Great Hall, Harry and Ron hid quickly behind a suit of armor next to the front door.

“How thick can you get?” Ron whispered ecstatically as Crabbe gleefully pointed out the cakes to Goyle and grabbed them. Grinning stupidly, they stuffed the cakes whole into their large mouths. For a moment, both of them chewed greedily, looks of triumph on their faces. Then, without the smallest change of expression, they both keeled over backward onto the floor.

By far the hardest part was hiding them in the closet across the hall. Once they were safely stowed among the buckets and mops, Harry yanked out a couple of the bristles that covered Goyle's forehead and Ron pulled out several of Crabbe's hairs. They also stole their shoes, because their own were far too small for Crabbe- and Goyle-size feet. Then, still stunned at what they had just done, they sprinted up to Moaning Myrtle's bathroom.

They could hardly see for the thick black

バケツやモップの間に二人を安全にしまい込んだあと、ハリーはゴイルの額を覆っているごわごわの髪を二、三本、えいっと引き抜いた。

ロンは、クラップの髪を数本引っこ抜いた。二人の靴も失敬した。

なにしろハリーたちの靴では、クラップ、ゴイル・サイズの足には小さ過ぎるからだ。それから、自分たちのやり遂げたことがまだ信じられないまま、二人は「嘆きのマートル」のトイレへと全速力で駆け出した。ハーマイオニーが大鍋をかき混ぜている小部屋から、もくもくと濃い黒い煙が立ち昇り、二人はほとんど何も見えなかった。ローブをたくし上げて鼻を覆いながら、二人は小部屋の戸をそっと叩いた。

「ハーマイオニー！」
門がはずれる音がして、ハーマイオニーが顔を輝かせ、待ちきれない様子で現れた。その後ろで、どろりと水あめ状になった煎じ薬がグググッ、ゴボゴボ泡立つ音が聞こえた。

トイレの便座にタンブラー・グラスが三つ用意されていた。

「取れた？」ハーマイオニーが息を弾ませて聞いた。

ハリーはゴイルの髪の毛を見せた。

「結構。わたしの方は、洗濯物置き場から、着替え用のローブを三着、こっそり調達しといたわ」

ハーマイオニーは小ぶりの袋を持ち上げて見せた。

「クラップとゴイルになったときに、サイズの大きいのが必要でしょ」

三人は大鍋をじっと見つめた。近くで見ると、煎じ薬はどろりとした黒っぽい泥のようで、ボコッボコッと鈍く泡立っていた。

「すべて、まちがいをなくやったと思うわ」
ハーマイオニーがしみだらけの「最も強力な魔法薬」のページを、神経質に読み返ししながら言った。

「見た目もこの本に書いてある通りだし…
…。これを飲むと、また自分の姿に戻るまで
きっかり一時間よ」

「次はなにをするの？」ロンがささやいた。

smoke issuing from the stall in which Hermione was stirring the cauldron. Pulling their robes up over their faces, Harry and Ron knocked softly on the door.

“Hermione?”

They heard the scrape of the lock and Hermione emerged, shiny-faced and looking anxious. Behind her they heard the *gloop gloop* of the bubbling, glutinous potion. Three glass tumblers stood ready on the toilet seat.

“Did you get them?” Hermione asked breathlessly.

Harry showed her Goyle’s hair.

“Good. And I sneaked these spare robes out of the laundry,” Hermione said, holding up a small sack. “You’ll need bigger sizes once you’re Crabbe and Goyle.”

The three of them stared into the cauldron. Close up, the potion looked like thick, dark mud, bubbling sluggishly.

“I’m sure I’ve done everything right,” said Hermione, nervously rereading the splotched page of *Moste Potente Potions*. “It looks like the book says it should ... once we’ve drunk it, we’ll have exactly an hour before we change back into ourselves.”

“Now what?” Ron whispered.

“We separate it into three glasses and add the hairs.”

Hermione ladled large dollops of the potion into each of the glasses. Then, her hand trembling, she shook Millicent Bulstrode’s hair out of its bottle into the first glass.

The potion hissed loudly like a boiling kettle and frothed madly. A second later, it had turned a sick sort of yellow.

“Urgh — essence of Millicent Bulstrode,”

「薬を三杯に分けて、髪の毛をそれぞれ薬に加えるの」ハーマイオニーがひしゃくでそれぞれのグラスに、どろりとした薬をたっぷり入れた。

それから震える手で、小瓶に入ったミリセント・ブルストロードの髪を、自分のグラスに振り入れ、煎じ薬は、やかんのお湯が沸騰するようなシューシューという音をたて、激しく泡立った。

次の瞬間、薬はむかむかするような黄色に変わった。

「おえーミリセント・ブルストロードのエキスだ」

ロンが胸糞が悪いという目つきをした。

「きっとイヤな味がするよ」

「さあ、あなたたちも加えて」ハーマイオニーが促した。

ハリーはゴイルの髪を真ん中のグラスに落とし入れ、ロンも三つ目のグラスにクラップのを入れた。

二つともシューシューと泡立ち、ゴイルのは鼻くそのようなカーキ色、クラップのは濁った暗褐色になった。

「ちょっと待って」ロンとハーマイオニーがグラスを取り上げたとき、ハリーが止めた。

「三人一緒にここで飲むのはやめた方がいい。クラップやゴイルに変身したら、この小部屋に収まりきらないよ。それに、ミリセント・ブルストロードだって、とても小柄とは言えないんだから」

「よく気づいたな」ロンは戸を開けながら言った。

「三人別々の小部屋にしよう」

ポリジュース薬を一滴もこぼすまいと注意しながら、ハリーは真ん中の小部屋に入り込んだ。

「いいかい！」ハリーが呼びかけた。

「いいよ」ロンとハーマイオニーの声だ。

「いち……にの……さん……」

鼻をつまんで、ハリーはゴックンと二口で薬を飲み干した。

煮込み過ぎたキャベツのような味がした。

途端に、体の中が、生きたヘビを飲み込んだみたいに振れだしたーハリーは吐き気がして、体をくの字に折ったーすると、焼ける

said Ron, eyeing it with loathing. “Bet it tastes disgusting.”

“Add yours, then,” said Hermione.

Harry dropped Goyle’s hair into the middle glass and Ron put Crabbe’s into the last one. Both glasses hissed and frothed: Goyle’s turned the khaki color of a booger, Crabbe’s a dark, murky brown.

“Hang on,” said Harry as Ron and Hermione reached for their glasses. “We’d better not all drink them in here. ... Once we turn into Crabbe and Goyle we won’t fit. And Millicent Bulstrode’s no pixie.”

“Good thinking,” said Ron, unlocking the door. “We’ll take separate stalls.”

Careful not to spill a drop of his Polyjuice Potion, Harry slipped into the middle stall.

“Ready?” he called.

“Ready,” came Ron’s and Hermione’s voices.

“One — two — three —”

Pinching his nose, Harry drank the potion down in two large gulps. It tasted like overcooked cabbage.

Immediately, his insides started writhing as though he’d just swallowed live snakes — doubled up, he wondered whether he was going to be sick — then a burning sensation spread rapidly from his stomach to the very ends of his fingers and toes — next, bringing him gasping to all fours, came a horrible melting feeling, as the skin all over his body bubbled like hot wax — and before his eyes, his hands began to grow, the fingers thickened, the nails broadened, the knuckles were bulging like bolts — his shoulders stretched painfully and a prickling on his forehead told him that hair was creeping down toward his eyebrows

ような感触が胃袋からサーッと広がり、手足の指先まで届いた。

次に、息が詰まりそうになって、全身が溶けるような気持ちの悪さに襲われ、四つんばいになった。

体中の皮膚が、蠟が熱で溶けるように泡立ち、ハリーの目の前で手は大きくなり、指は太くなり、爪は横に広がり、拳がボルトのように膨れ上がった。両肩はベキベキと広がって痛かったし、額はチクチクするので髪の毛が眉のところまで這い降りてきたことがわかった。

胸囲も広がり、樽のタガが引きちぎられるようにハリーのローブを引き裂いた。

足は四サイズも小さいハリーの靴の中でうめいていた。

始まるのも突然だったが、終わるのも突然だった。

冷たい石の床の上に、ハリーはうつ伏せに突っ伏し、一番奥の小部屋で「嘆きのマートル」が気難しげにゴボゴボ音をたてているのを聞いていた。

ハリーはやっとこさ靴を脱ぎ捨てて、立ち上がった——そうか、ゴイルになるって、こういう感じだったのか。

巨大な震える手で、ハリーは、踝から三十センチほど上にぶら下がっている自分の服をはぎ取り、着替えのローブを上からかぶり、ボートのようなゴイルの靴の紐をしめた。手を伸ばして目を覆っている髪を掻き上げようとしたが、ごわごわの短い髪が額の下の方にあるだけだった。目がよく見えなかったのはメガネのせいだったと気づいた。もちろんゴイルはメガネが要らない。

ハリーはメガネをはずし、二人に呼びかけた。

「二人とも大丈夫？」

口から出てきたのは、ゴイルの低いしゃがれ声だった。

「ああ」

右の方からクラップの唸るような低音が聞こえた。

ハリーは戸の鍵を開け、ひび割れた鏡の前に進み出た。

ゴイルがくぼんだ、どんより眼でハリーを見

— his robes ripped as his chest expanded like a barrel bursting its hoops — his feet were agony in shoes four sizes too small —

As suddenly as it had started, everything stopped. Harry lay facedown on the stone-cold floor, listening to Myrtle gurgling morosely in the end toilet. With difficulty, he kicked off his shoes and stood up. So this was what it felt like, being Goyle. His large hand trembling, he pulled off his old robes, which were hanging a foot above his ankles, pulled on the spare ones, and laced up Goyle's boatlike shoes. He reached up to brush his hair out of his eyes and met only the short growth of wiry bristles, low on his forehead. Then he realized that his glasses were clouding his eyes because Goyle obviously didn't need them — he took them off and called, "Are you two okay?" Goyle's low rasp of a voice issued from his mouth.

"Yeah," came the deep grunt of Crabbe from his right.

Harry unlocked his door and stepped in front of the cracked mirror. Goyle stared back at him out of dull, deepset eyes. Harry scratched his ear. So did Goyle.

Ron's door opened. They stared at each other. Except that he looked pale and shocked, Ron was indistinguishable from Crabbe, from the pudding-bowl haircut to the long, gorilla arms.

"This is unbelievable," said Ron, approaching the mirror and prodding Crabbe's flat nose. "*Unbelievable.*"

"We'd better get going," said Harry, loosening the watch that was cutting into Goyle's thick wrist. "We've still got to find out where the Slytherin common room is. I only hope we can find someone to follow ..."

Ron, who had been gazing at Harry, said,

つめ返していた。
ハリーが耳を掻くとゴイルも掻いた。
ロンの戸が開いた。二人は互いにジロジロ見た。
ちょっと青ざめてショックを受けた様子を別にすれば、鍋底カットの髪型もゴリラのように長い手も、ロンはクラップそのものだった。
「おっどろいたなあ」
鏡に近寄り、クラップのぺちゃんこの鼻を突つつきながらロンが繰り返し言った。「おっどろいたなあ」
「急いだ方がいい」ハリーはゴイルの太い手首に食い込んでいる腕時計のバンドを緩めながら言った。
「スリザリンの談話室がどこにあるか見つけないと。誰かのあとをつけられればいいんだけど……」
ハリーをじっと見つめていたロンが言った。
「ねえ、ゴイルがなんか考えてるのって気味悪いよな」
ロンはハーマイオニーの戸をドンドン叩いた。
「出てこいよ。行かなくちゃ……」
甲高い声が返ってきた。
「わたしーわたし行けないと思うわ。二人だけで行って」
「ハーマイオニー、ミリセント・ブルストロードがブスなのはわかってるよ。誰も君だってこと、わかりゃしない」
「ダメーほんとにダメー行けないわ。二人とも急いで。時間をむだにしないで」
ハリーは当惑してロンを見た。
「その目つきの方がゴイルらしいや」ロンが言った。
「先生がやつに質問すると、必ずそんな目をする」
「ハーマイオニー、大丈夫なの？」ハリーがドア越しに声をかけた。
「大丈夫……わたしは大丈夫だから……行って…」
ハリーは腕時計を見た。貴重な六十分のうち、五分もたってしまっていた。
「あとでここで会おう。いいね？」ハリーが言った。

“You don’t know how bizarre it is to see Goyle *thinking*.” He banged on Hermione’s door. “C’mon, we need to go —”

A high-pitched voice answered him.

“I — I don’t think I’m going to come after all. You go on without me.”

“Hermione, we know Millicent Bulstrode’s ugly, no one’s going to know it’s you —”

“No — really — I don’t think I’ll come. You two hurry up, you’re wasting time —”

Harry looked at Ron, bewildered.

“*That* looks more like Goyle,” said Ron. “That’s how he looks every time a teacher asks him a question.”

“Hermione, are you okay?” said Harry through the door.

“Fine — I’m fine — go on —”

Harry looked at his watch. Five of their precious sixty minutes had already passed.

“We’ll meet you back here, all right?” he said.

Harry and Ron opened the door of the bathroom carefully, checked that the coast was clear, and set off.

“Don’t swing your arms like that,” Harry muttered to Ron.

“Eh?”

“Crabbe holds them sort of stiff. …”

“How’s this?”

“Yeah, that’s better. …”

They went down the marble staircase. All they needed now was a Slytherin that they could follow to the Slytherin common room, but there was nobody around.

ハリーとロンはトイレの入り口の戸をそろそろと開け、周りに誰もいないことを確かめてから出発した。

「腕をそんなふうに振っちゃダメだよ」ハリーがロンにささやいた。

「えっ！」

「クラブって、こんなふうに腕を突っ張ってる……」

「こうかい？」

「ウン、その方がいい」

二人は大理石の階段を下りて行った。あとは、誰かスリザリン生が来れば、談話室までついていけばいい。しかし、誰もいない。

「なんかいい考えはない？」ハリーがささやいた。

「スリザリン生は朝食のとき、いつもあの辺から現れるな」

ロンは地下牢への入口あたりを顎でしゃくった。

その言葉が終わらないうちに、長い巻き毛の女子生徒が、その入口から出てきた。

「すみません」ロンが急いで彼女に近寄った。

「僕たちの談話室への道を忘れちゃった」

「なんですって！」そっけない返事が返ってきた。

「僕たちの談話室ですって！わたし、レイブンクローよ」

女子生徒はうさんくさそうに二人を振り返りながら立ち去った。

ハリーとロンは急いで石段を下りていった。下は暗く、クラブとゴイルのデカ足が床を踏むので足音がひときわ大きくこだました——思ったほど簡単じゃない——二人はそう感じていた。

迷路のような廊下には人影もなかった。二人は、あと何分あるかとしょっちゅう時間を確認しながら、奥へ奥へと学校の地下深く入っていった。

十五分も歩いて、二人があきらめかけたとき、急に前の方で何か動く音がした。

「オッ！」ロンが勇みたった。

「今度こそ連中の一人だ！」

脇の部屋から誰か出てきた。しかし、急いで近寄ってみると、がっくりした。

“Any ideas?” muttered Harry.

“The Slytherins always come up to breakfast from over there,” said Ron, nodding at the entrance to the dungeons. The words had barely left his mouth when a girl with long, curly hair emerged from the entrance.

“Excuse me,” said Ron, hurrying up to her. “We’ve forgotten the way to our common room.”

“I beg your pardon?” said the girl stiffly. “Our common room? *I’m a Ravenclaw.*”

She walked away, looking suspiciously back at them.

Harry and Ron hurried down the stone steps into the darkness, their footsteps echoing particularly loudly as Crabbe’s and Goyle’s huge feet hit the floor, feeling that this wasn’t going to be as easy as they had hoped.

The labyrinthine passages were deserted. They walked deeper and deeper under the school, constantly checking their watches to see how much time they had left. After a quarter of an hour, just when they were getting desperate, they heard a sudden movement ahead.

“Ha!” said Ron excitedly. “There’s one of them now!”

The figure was emerging from a side room. As they hurried nearer, however, their hearts sank. It wasn’t a Slytherin, it was Percy.

“What’re you doing down here?” said Ron in surprise.

Percy looked affronted.

“That,” he said stiffly, “is none of your business. It’s Crabbe, isn’t it?”

“Wh — oh, yeah,” said Ron.

スリザリン生ではなく、パーシーだった。
「こんなところでなんの用だい？」ロンが驚いて聞いた。
パーシーはむっとした様子だ。そっけない返事をした。
「そんなこと、君の知ったことじゃない。そこにいるのはクラブだな？」
「エーああ、ウン」ロンが答えた。
「それじゃ、自分の寮に戻りたまえ」パーシーが厳しく言った。
「このごろは暗い廊下をうろうろしていると危ない」
「自分はどうなんだ」とロンが突ついた。
「僕は」パーシーは胸を張った。
「監督生だ。僕を襲うものは何もない」。突然、ハリーとロンの背後から声が響いた。ドラコ・マルフォイがこっちへやってくる。ハリーは生まれて初めて、ドラコに会えて嬉しいと思った。
「おまえたち、こんなところにいたのか」マルフォイが二人を見て、いつもの気取った言い方をした。
「二人とも、今まで大広間でバカ食いしていたのか？ ずっと探していたんだ。すごくおもしろい物を見せてやろうと思って」マルフォイはパーシーを威圧するようににらみつけた。
「ところで、ウィーズリー、こんなところでなんの用だい？」マルフォイがせせら笑った。パーシーはカンカンになった。
「監督生に少しは敬意を示したらどうだい！ 君の態度は気に入らん！」
マルフォイはフンと鼻であしらい、ハリーとロンについてこいと合図した。
ハリーはもう少しでパーシーに謝りそうになったが、危うく踏みとどまった。
二人はマルフォイのあとに続いて急いだ。角を曲がって次の廊下に出るとき、マルフォイが言った。
「あのピーター・ウィーズリーのやつー」
「パーシー」思わずロンが訂正した。
「なんでもいい」とマルフォイ。
「あいつ、どうもこのごろかき回っているようだ。何が目的なのか、僕にはわかってる。スリザリンの継承者を、一人で捕まえようと

“Well, get off to your dormitories,” said Percy sternly. “It’s not safe to go wandering around dark corridors these days.”

“You are,” Ron pointed out.

“I,” said Percy, drawing himself up, “am a prefect. Nothing’s about to attack *me*.”

A voice suddenly echoed behind Harry and Ron. Draco Malfoy was strolling toward them, and for the first time in his life, Harry was pleased to see him.

“There you are,” he drawled, looking at them. “Have you two been pigging out in the Great Hall all this time? I’ve been looking for you; I want to show you something really funny.”

Malfoy glanced witheringly at Percy.

“And what’re you doing down here, Weasley?” he sneered.

Percy looked outraged.

“You want to show a bit more respect to a school prefect!” he said. “I don’t like your attitude!”

Malfoy sneered and motioned for Harry and Ron to follow him. Harry almost said something apologetic to Percy but caught himself just in time. He and Ron hurried after Malfoy, who said as they turned into the next passage, “That Peter Weasley —”

“Percy,” Ron corrected him automatically.

“Whatever,” said Malfoy. “I’ve noticed him sneaking around a lot lately. And I bet I know what he’s up to. He thinks he’s going to catch Slytherin’s heir single-handed.”

He gave a short, derisive laugh. Harry and Ron exchanged excited looks.

Malfoy paused by a stretch of bare, damp

思ってるんだ」
マルフォイは嘲るように短く笑った。ハリーとロンはドキドキして目と目を見交わした。湿ったむき出しの石が並ぶ壁の前でマルフォイは立ち止まった。
「新しい合言葉はなんだったかな？」マルフォイはハリーに聞いた。
「えーとー」
「あ、そうそうー純血！」マルフォイは答えも開かずに合言葉を言った。
壁に隠された石の扉がするすると開いた。マルフォイがそこを通り、ハリーとロンがそれに続いた。
スリザリンの談話室は、細長い天井の低い地下室で、壁と天井は粗削りの石造りだった。天井から丸い緑がかったランプが鎖で吊るしてある。前方の壮大な彫刻を施した暖炉ではパチパチと火がはじけ、その周りに、彫刻入りの椅子に座ったスリザリン生の影がいくつも見えた。「ここで待っている」マルフォイは暖炉から離れたところにある空の椅子を二人に示した。
「今持ってくるよー父上が僕に送ってくれたばかりなんだー」
いったい何を見せてくれるのかといぶかりながら、ハリーとロンは椅子に座り、できるだけくつろいだふうを装った。
マルフォイは間もなく戻ってきた。新聞の切り抜きのような物を持っている。それをロンの鼻先に突き出した。
「これは笑えるぞ」マルフォイが言った。ハリーはロンが驚いて目を見開いたのを見た。
ロンは切り抜きを急いで読み、無理に笑ってそれをハリーに渡した。
「日刊予言者新聞」の切り抜きだった。

魔法省での尋問

マグル製品不正使用取締局、局長のアーサー・ウィーズリーはマグルの自動車に魔法をかけたかどで、

今日、金貨五十ガリオンの罰金を言い渡された。

ホグワーツ魔法魔術学校の理事の一人、ルシウス・マルフォイ氏は、今日、ウィーズリ

stone wall.

“What’s the new password again?” he said to Harry.

“Er —” said Harry.

“Oh, yeah — *pure-blood!*” said Malfoy, not listening, and a stone door concealed in the wall slid open. Malfoy marched through it, and Harry and Ron followed him.

The Slytherin common room was a long, low underground room with rough stone walls and ceiling from which round, greenish lamps were hanging on chains. A fire was crackling under an elaborately carved mantelpiece ahead of them, and several Slytherins were silhouetted around it in high-backed chairs.

“Wait here,” said Malfoy to Harry and Ron, motioning them to a pair of empty chairs set back from the fire. “I’ll go and get it — my father’s just sent it to me —”

Wondering what Malfoy was going to show them, Harry and Ron sat down, doing their best to look at home.

Malfoy came back a minute later, holding what looked like a newspaper clipping. He thrust it under Ron’s nose.

“That’ll give you a laugh,” he said.

Harry saw Ron's eyes widen in shock. He read the clipping quickly, gave a very forced laugh, and handed it to Harry.

It had been clipped out of the *Daily Prophet*, and it said:

INQUIRY AT THE MINISTRY OF MAGIC

Arthur Weasley, Head of the Misuse of Muggle Artifacts Office, was today fined fifty Galleons for bewitching a Muggle car.

一氏の辞任を要求した。

なお、問題の車は先ごろ前述の学校に墜落している。

「ウィーズリーは魔法省の評判を貯めた」マルフォイ氏は当社の記者にこう語った。

「氏はわれわれの法律を制定するにふさわしくないことは明らかで、彼の手になるバカバカしい

『マグル保護法』はただちに廃棄すべきである」

ウィーズリー氏のコメントは取ることができなかったが、彼の妻は記者団に対し、

「とっとと消えないと、家の屋根裏お化けをけしかけるわよ」と発言した。

「どうだ！」ハリーが切り抜きを返すと、マルフォイは待ちきれないように答えを促した。

「おかしいだろう！」

「ハッ、ハッ」ハリーは沈んだ声で笑った。「アーサー・ウィーズリーはあれほどマグルびいきなんだから、杖を真っ二つにへし折ってマグルの仲間に入れればいい」マルフォイは蔑むように言った。

「ウィーズリーの連中の行動をしてみろ。ほんとに純血かどうか怪しいものだ」ロンの——いや、クラップの——顔が怒りで歪んだ。

「クラップ、どうかしたか？」マルフォイがぶっきらぼうに聞いた。

「腹が痛い」ロンがうめいた。

「ああ、それなら医務室に行け。あそこにいる『穢れた血』の連中を、僕からだと言って蹴っ飛ばしてやれ」

マルフォイがクスクス笑いながら言った。

「それにしても、『日刊予言者新聞』が、これまでの事件をまだ報道していないのには驚くよ」

マルフォイが考え深げに話し続けた。

「たぶん、ダンプルドアが口止めしてるんだろう。こんなことがすぐにもお終いにならないと、彼はクビになるよ。父上は、ダンプルドアがいることが、この学校にとって最悪の事態だと、いつもおっしゃっている。彼はマグルびいきだ。きちんとした校長なら、あん

Mr. Lucius Malfoy, a governor of Hogwarts School of Witchcraft and Wizardry, where the enchanted car crashed earlier this year, called today for Mr. Weasley's resignation.

“Weasley has brought the Ministry into disrepute,” Mr. Malfoy told our reporter. “He is clearly unfit to draw up our laws and his ridiculous Muggle Protection Act should be scrapped immediately.”

Mr. Weasley was unavailable for comment, although his wife told reporters to clear off or she'd set the family ghoul on them.

“Well?” said Malfoy impatiently as Harry handed the clipping back to him. “Don't you think it's funny?”

“Ha, ha,” said Harry bleakly.

“Arthur Weasley loves Muggles so much he should snap his wand in half and go and join them,” said Malfoy scornfully. “You'd never know the Weasleys were purebloods, the way they behave.”

Ron's — or rather, Crabbe's — face was contorted with fury.

“What's up with you, Crabbe?” snapped Malfoy.

“Stomachache,” Ron grunted.

“Well, go up to the hospital wing and give all those Mudbloods a kick from me,” said Malfoy, snickering. “You know, I'm surprised the *Daily Prophet* hasn't reported all these attacks yet,” he went on thoughtfully. “I suppose Dumbledore's trying to hush it all up. He'll be sacked if it doesn't stop soon. Father's always said old Dumbledore's the worst thing that's ever happened to this place. He loves Muggle-borns. A decent headmaster would

なクリービーみたいなくずのおべんちゃらを、絶対入学させたりはしない」マルフォイは架空のカメラを構えて写真を撮る格好をし、コリンそっくりの残酷な物まねをしはじめた。

「ポッター、写真を撮ってもいいかい？ ポッター、サインをもらえるかい？ 君の靴をなめてもいいかい？ ポッター？」

マルフォイは手をパタリと下ろしてハリーとロンを見た。

「二人とも、いったいどうしたんだ！」もう遅過ぎたが、二人は無理やり笑いをひねり出した。

それでもマルフォイは満足したようだった。たぶん、クラブもゴイルもいつもこれくらい鈍いのだろう。

「聖ポッター、『穢れた血』の友」マルフォイはゆっくりと言った。

「あいつもやっぱりまともな魔法使いの感覚を持っていない。そうでなければあの身のほど知らずのグレンジャー・ハーマイオニーなんかとつき合ったりしないはずだ。それなのに、みながあいつをスリザリンの継承者だなんて考えている！」

ハリーとロンは息を殺して待ち構えた。あとちょっとでマルフォイは自分がやったと口を割る。

しかし、そのとき――

「いったい誰が継承者なのか僕が知ってたらなあ」マルフォイがじれったそうに言った。

「手伝ってやれるのに」

ロンは顎がカクンと開いた。クラブの顔がいつもよりもっと愚鈍に見えた。

幸いマルフォイは気づかない。ハリーはすばやく質問した。

「誰が陰で糸を引いてるのか、君に考えがあるんだろう……」

「いや、ない。ゴイル、何度も同じことを言わせるな」

マルフォイが短く答えた。

「それにへ父上は前回『部屋』が開かれたときのことも、まったく話してくださらない。もっとも五十年前だから、父上の前の時代だ。でも、父上はすべてご存知だし、すべてが沈黙させられているから、僕がそのことを

never've let slime like that Creevey in.”

Malfoy started taking pictures with an imaginary camera and did a cruel but accurate impression of Colin: “‘Potter, can I have your picture, Potter? Can I have your autograph? Can I lick your shoes, please, Potter?’ ”

He dropped his hands and looked at Harry and Ron.

“What’s the *matter* with you two?”

Far too late, Harry and Ron forced themselves to laugh, but Malfoy seemed satisfied; perhaps Crabbe and Goyle were always slow on the uptake.

“Saint Potter, the Mudbloods’ friend,” said Malfoy slowly. “He’s another one with no proper wizard feeling, or he wouldn’t go around with that jumped-up Granger Mudblood. And people think *he’s* Slytherin’s heir!”

Harry and Ron waited with bated breath: Malfoy was surely seconds away from telling them it was him — but then —

“I *wish* I knew who it *is*,” said Malfoy petulantly. “I could help them.”

Ron’s jaw dropped so that Crabbe looked even more clueless than usual. Fortunately, Malfoy didn’t notice, and Harry, thinking fast, said, “You must have some idea who’s behind it all. ...”

“You know I haven’t, Goyle, how many times do I have to tell you?” snapped Malfoy. “And Father won’t tell me *anything* about the last time the Chamber was opened either. Of course, it was fifty years ago, so it was before his time, but he knows all about it, and he says that it was all kept quiet and it’ll look suspicious if I know too much about it. But I know one thing — last time the Chamber of

知り過ぎてしていると怪しまれるとおっしゃるんだ。でも、一つだけ知っている。この前『秘密の部屋』が開かれたとき、『穢れた血』が一人死んだ。だから、今度も時間の問題だ。あいつらのうち誰かが殺される。グレンジャーだといいのに」

マルフォイは小気味よさそうに言った。ロンはクラップの巨大な拳を握りしめていた。ロンがマルフォイにパンチを食らわしたら、正体がばれてしまう、とハリーは目で警戒信号を送った。

「前に『部屋』を開けた者が捕まったかどうか、知ってる？」ハリーが聞いた。

「ああ、ウン……誰だったにせよ、追放された」とマルフォイが答えた。

「たぶん、まだアズカバンにいるだろう」

「アズカバン？」ハリーはキョトンとした。

「アズカバン——魔法使いの牢獄だ」マルフォイは信じられないという目つきでハリーを見た。

「まったく、ゴイル、おまえがこれ以上うすのろだったら、後ろに歩きはじめるだろうよ」

「父上は、僕が目立たないようにして、スリザリンの継承者にやるだけやらせておけておっしゃる。この学校には『穢れた血』の粛清が必要だって。でも関わり合いになるなって。もちろん、父上は今、自分の方も手一杯なんだ。ほら、魔法省が先週、僕たちの館を立入り検査しただろう？」マルフォイは椅子に座ったまま落ち着かない様子で体を揺すった。

ハリーはゴイルの鈍い顔をなんとか動かして心配そうな表情をした。

「そうなんだ…！」とマルフォイ。

「幸い、たいした物は見つからなかったけど。父上は非常に貴重な闇の魔術の道具を持っているんだ。応接間の床下に我が家の『秘密の部屋』があって——」

「ホー！」ロンが言った。

マルフォイがロンを見た。ハリーも見た。ロンが赤くなった。髪の毛まで赤くなった。鼻もだんだん伸びてきた——時間切れだ。ロンは自分に戻りつつあった。ハリーを見るロンの目に急に恐怖の色が浮かんだのは、ハリ

Secrets was opened, a Mudblood *died*. So I bet it's a matter of time before one of them's killed this time. ... I hope it's Granger," he said with relish.

Ron was clenching Crabbe's gigantic fists. Feeling that it would be a bit of a giveaway if Ron punched Malfoy, Harry shot him a warning look and said, "D'you know if the person who opened the Chamber last time was caught?"

"Oh, yeah ... whoever it was was expelled," said Malfoy. "They're probably still in Azkaban."

"Azkaban?" said Harry, puzzled.

"Azkaban — *the wizard prison*, Goyle," said Malfoy, looking at him in disbelief. "Honestly, if you were any slower, you'd be going backward."

He shifted restlessly in his chair and said, "Father says to keep my head down and let the Heir of Slytherin get on with it. He says the school needs ridding of all the Mudblood filth, but not to get mixed up in it. Of course, he's got a lot on his plate at the moment. You know the Ministry of Magic raided our manor last week?"

Harry tried to force Goyle's dull face into a look of concern.

"Yeah ..." said Malfoy. "Luckily, they didn't find much. Father's got some *very* valuable Dark Arts stuff. But luckily, we've got our own secret chamber under the drawing-room floor —"

"Ho!" said Ron.

Malfoy looked at him. So did Harry. Ron blushed. Even his hair was turning red. His nose was also slowly lengthening — their hour was up, Ron was turning back into himself,

一もそうだからに違いない。二人は大急ぎで立ち上がった。

「胃薬だ」ロンがうめいた。

二人は振り向きもせず、スリザリンの談話室を端から端まで一目散に駆け抜け、石の扉に猛然と体当たりし、廊下を全力疾走した。

――なにとぞマルフォイがなんにも気づきませんように――と二人は祈った。

ハリーはゴイルのダボ靴の中で足がズルズル滑るのを感じたし、自分が縮んで行くので、ローブをたくし上げなければならなかった。二人は階段をドタバタと駆け上がり、暗い玄関ホールにたどり着いた。

クラップとゴイルを閉じ込めて鍵を掛けた物置の中から、激しくドンドンと戸を叩くこもった音がしている。

物置の戸の外側に靴を置き、ソックスのまま全速力で大理石の階段を上り、二人は「嘆きのマートル」のトイレに戻った。

「まあ、まったく時間のムダにはならなかったよな」ロンがぜいぜい息を切らしながら、トイレの中からドアを閉めた。

「襲っているのが誰なのかはまだわからないけど、明日パパに手紙を書いてマルフォイの応接間の床下を調べるように言おう」

ハリーはひび割れた鏡で自分の顔を調べた。普段の顔に戻っていた。メガネをかけていると、ロンがハーマイオニーの入っている小部屋の戸をドンドン叩いていた。

「ハーマイオニー、出てこいよ。僕たち君に話すことが山ほどあるんだー」

「帰って！」ハーマイオニーが叫んだ。

ハリーとロンは顔を見合わせた。

「どうしたんだい！」ロンが聞いた。

「もう元の姿に戻ったはずだろ。僕たちは…」

「嘆きのマートル」が急にするとその小部屋の戸から出てきた。

こんなに嬉しそうなマートルを、ハリーは初めて見た。

「きゃはははは！見てのお楽しみ」マートルが言った「ひどいから！」

門が横に滑る音がして、ハーマイオニーが出てきた。しゃくりあげ、頭のとっぺんまでローブを引っ張り上げている。

and from the look of horror he was suddenly giving Harry, he must be, too.

They both jumped to their feet.

“Medicine for my stomach,” Ron grunted, and without further ado they sprinted the length of the Slytherin common room, hurled themselves at the stone wall, and dashed up the passage, hoping against hope that Malfoy hadn’t noticed anything. Harry could feel his feet slipping around in Goyle’s huge shoes and had to hoist up his robes as he shrank; they crashed up the steps into the dark entrance hall, which was full of a muffled pounding coming from the closet where they’d locked Crabbe and Goyle. Leaving their shoes outside the closet door, they sprinted in their socks up the marble staircase toward Moaning Myrtle’s bathroom.

“Well, it wasn’t a complete waste of time,” Ron panted, closing the bathroom door behind them. “I know we still haven’t found out who’s doing the attacks, but I’m going to write to Dad tomorrow and tell him to check under the Malfoys’ drawing room.”

Harry checked his face in the cracked mirror. He was back to normal. He put his glasses on as Ron hammered on the door of Hermione’s stall.

“Hermione, come out, we’ve got loads to tell you —”

“Go away!” Hermione squeaked.

Harry and Ron looked at each other.

“What’s the matter?” said Ron. “You must be back to normal by now, we are —”

But Moaning Myrtle glided suddenly through the stall door. Harry had never seen her looking so happy.

“Ooooooh, wait till you see,” she said. “It’s

「どうしたんだよ？」ロンがためらいながら聞いた。

「ミリセントの鼻かなんか、まだくっついてるのかい！」

ハーマイオニーはローブを下げた。ロンがのけぞって手洗い台にはまった。

ハーマイオニーの顔は黒い毛で覆われ、目は黄色に変わっていたし、髪の毛の中から、長い三角耳が突き出していた。

「あれ、ね、猫の毛だったの！」ハーマイオニーが泣き喚いた。

「ミ、ミリセント・ブルストロードは猫を飼ってたに、ち、違くないわ！それに、このせ、煎じ薬は動物変身に便っちゃいけないの！」

「う、あ」とロン。

「あんた、ひどくからかわれるわよ」マートルは嬉しそうだ。

「大丈夫だよ、ハーマイオニー」ハリーは即座に言ってハーマイオニーの猫の肉球になった手をとった。

「医務室に連れて行ってあげるよ。マダム・ポンフリーはうるさく追及しない人だし…」

ハーマイオニーにトイレから出るよう説得するのに、ずいぶん時間がかかった。

「嘆きのマートル」がゲラゲラ大笑いして三人を煽りたて、マートルの言葉に追われるように、三人は足を速めた。

「みんながあんたの尻尾を見つけて、なーんて言うかしらー！」

awful —”

They heard the lock slide back and Hermione emerged, sobbing, her robes pulled up over her head.

“What’s up?” said Ron uncertainly. “Have you still got Millicent’s nose or something?”

Hermione let her robes fall and Ron backed into the sink.

Her face was covered in black fur. Her eyes had turned yellow and there were long, pointed ears poking through her hair.

“It was a c-cat hair!” she howled. “M-Millicent Bulstrode m-must have a cat! And the p-potion isn’t supposed to be used for animal transformations!”

“Uh-oh,” said Ron.

“You’ll be teased something *dreadful*,” said Myrtle happily.

“It’s okay, Hermione,” said Harry quickly. “We’ll take you up to the hospital wing. Madam Pomfrey never asks too many questions. …”

It took a long time to persuade Hermione to leave the bathroom. Moaning Myrtle sped them on their way with a hearty guffaw. “Wait till everyone finds out you’ve got a *tail*!”